

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	後発開発途上国における農業・農村開発の課題認識による グローバル意識の醸成	
学部・研究科名	農学部	
実施期間	2017年2月16日～2月27日	
研修先(国・都市・施設名)	カンボジア	
参加者数：8名		知の森基金からの支援者：3名
プログラム概要	農学部生を対象に、グローバル意識の醸成を目指すステップとして、開発途上国の農業生産・流通の現状と課題、都市部と農村の経済格差を体感し認識するとともに、異文化の中で英語や現地語を交えたコミュニケーションの経験を得るべく海外農学実習を実施した。 実習では、学部間協定校であるカンボジア王立農業大学の学部生・卒業生とともに、農村での小規模養豚業の経営実態や農産物市場における豚・豚肉の流通について、市場調査や農家インタビュー調査を実施した。調査結果のまとめ・分析を行い、同大学畜産学部の学生と共にジョイントセミナーを実施し、活発な質疑応答を行った。 本実習への参加者は、開発途上国の農業・農村の課題を理解するとともに、コミュニケーション能力向上の必要性の意識を高め、日本とは違った食・住の体験を通して「海外に出る」ことに対する自信を強化した。また、農村調査を経験することで、東南アジアの農村や日本の農村での課題把握や解決に資する調査・研究に発展させる希望を持ち、実際に専攻研究に結びつけるための研究計画を模索し始めている。	

実施状況・成果

王立農業大学(RUA)の学生やスタッフとともに農村・市場調査を行うことで、農業・農村の現状と課題を理解するだけでなく、農業開発の意義やその中での農学の役割の認識と共に、自分自身が行おうとしている学修と研究の位置づけや、研究の道筋を考える機会を提供できたと考える。

本プログラムの振り返りレポートでは、本実習に参加することで、以下のような自己評価が多くの学生にみられた。
・農業・農村の状況を把握するための調査手法やその実践方法を体験できたことで、フィールド調査のノウハウやエッセンスを学び、その大変さや面白さも含めて経験を蓄積することができた。
・開発途上国の農業・農村を体験することで、農学の重要性や役割の認識を強化し、グローバルな視点をより具体的に持つことができた。
・異文化の中での王立農業大学学生との英語による共同作業や、現地のクメール語という英語以外の母国語を持つ異文化の中で、コミュニケーション能力の向上の必要性を認識するとともに、困難な状況下でも身振り手振りを交えて、理解し合える自信を身につけた。
・カンボジアの食文化や内戦の歴史に触れることで、日本と違うものを体験する重要性や視野の広がり、異文化や背景を理解する重要性を認識した。

参加者の多くは、本プログラムの経験を経て、専攻演習や専攻研究における学修・研究の内容や方法を具体的に考え始めている。農学に取り組む視野が広がることで、農学の意義を認識することができただけでなく、コミュニケーション力の課題も認識できたようである。また、具体的に「調査」を体験しそのノウハウを学ぶと共に面白さを知ること、より主体的な学修・研究思考パターンの構築と行動力が醸成されていると言える。本プログラムの経験から、グローバルな視点や異文化への理解が深まるとともに、現場において様々な人々とコミュニケーションを行う自信がつくことで、国内外の農業/農村のフィールドにおいて活動することの壁が低くなり、自分自身の行動範囲の想定が広がったようである。

参加した8人の学生の内、1人の4年生以外は2年生(3人)、3年生(4人)であったが、以下6人がすでに専攻研究や留学を目指して次のステップを踏み出す具体的な計画を検討している。
・ネパール、カンボジア、ベトナムでの農業/農村調査:3人
・南信地域での農業技術や地産地消についての調査:2人
・海外長期留学(オーストラリア)を目指す学生:1人(大学間交換留学生としてすでに留学が決定している。)

本「海外農学実習」は、農学部の中で単位認定プログラムとして位置づけられており、1年次の農学入門、2年次の国際農学概論や信州農学概論といったグローバル/ローカル科目での学びを土台として、海外での実践演習の機会と位置づけられる。教育プログラムの中に体系的に組み込まれた本実習において、参加者は開発途上国の農村で「調査」という学術的手法を用いて体験することで、異文化体験の中でより具体的に研究に取り組む方法を学びながら、より具体的に開発途上国の農業・農村の実情を把握する貴重な機会を得ることができている。本実習を行うことで、講義とフィールド実習が効果的に組み合わせられ、グローバルな視点を醸成しながら主体的に専攻演習/研究に取り組む人材育成に貢献する教育プログラムの重要例として評価できる。

学生の声①ー農学部 学生

今回このように海外の状況を知れたのはよい経験になったと思う。特に、日本においてのみのことを考えるのではなく、広い視点を持つよう心掛けが出来るように努力したい。グローバル化が進む中であるため、将来は海外で仕事をする機会もあるかもしれない。そのため今回のように現地の人と英語でコミュニケーションを取りながら、さらに現地の人と触れ合うことなどはとても良い経験であるといえる。

学生の声②ー農学部 学生

個人的に一番大きいと感じる成果は、実施調査を行えたことである。私は農業経済学研究室に所属しており、卒業研究でも実施調査を駆使したものになるだろうと考えている。その研究の前に経験することが出来たということは、自分が調査する際にある程度イメージをもち、準備できるということ意味する。したがって、円滑な調査が出来るようになると考えている。ほかにも、研修前に想定していたものと実際調査したものを比較すると、予想外のことが多く起き、視野が広がったように感じる。

調査方法についてのディスカッション



RUAの学生と共同で、養豚農家へのインタビューに挑戦

